 富山県 立山カルデラ砂防博物館

博物館 だより

No.61
2015.7.20

CONTENTS

- 研究と解説……………2
- 活動報告……………4
- 山と川から……………5
- ニューストピックス
(4月~6月)……………6
- 砂防のページ……………7
- イベント案内……………8



産卵中のアズマヒキガエル
(詳細は5p参照)

史料から見る立山カルデラと砂防(前編)

立山連峰誌料の中に立山案内記として1903(明治36)年に出版された『立山権現』という書物があります。この本は、浅地 倫が、立山登山を試みた時の見聞に古来の伝説を加えて書いたものです。これと類似したもので、明治初期に立山カルデラへ訪れた「外国人たちの紀行文」があります。これらを繙いてみると、当時の立山カルデラの姿や立山温泉の様子など、立山カルデラ砂防博物館の基ともいえる様子が書かれています。

これらの著書は、100年以上も前に書かれているもので、当時の様子に思いを馳せながら、これからの立山カルデラを考える一助になればと思い、この稿を書いた次第であります。

表題は、「史料から見る立山カルデラと砂防」と題して、浅地 倫のほか、アーネスト・サトウ、パーシヴァル・ローエル、ウォルター・ウェストンの4人の著書から、彼らが見た立山カルデラの様子を抜粋して、それに注釈を書き加えてみました。また、内容が多岐にわたることから、「立山温泉」「立山カルデラ」および「立山新道」の3回に分けて考えてみたいと思います。

今回は「立山温泉」です。

1. 浅地 倫の見た立山温泉

—富山市郊外の山室村々長

—『立山権現』を立山案内記として執筆

この地、元来噴火口の址にして四面皆山を以て囲み宛も釜底の如し。客舎数棟あり、湯川の南岸に少し広い所に台所と称する上等室があるが一棟を除けば他は長屋と称し、悉く下等室のものなり。各棟殆ど10室に分かれ、各室又数人を雑居せしめる。毎年6月5日に開き10月5日に閉じる。その間120日にして浴客、日々多きは4,500人、少なきも100人を下らない。客舎人溢れる時は薬師堂に宿る者すらありという。客舎に入れば薄暗き行燈と煎餅の如き布団と垢染みたる枕、鍋、飯櫃、手桶、割木など持ち来たる貴賤老幼を問わず自炊を免れざるがゆえになり。1日の室貸料一人上等11銭、下等8銭5厘、布団は一枚上等4銭、中等3銭、下等2銭、枕は一個5厘にして、外は入浴料3銭を要す。此所には米、駄菓子、卵、酒、麩、スルメ、ニンジンなどを売れるが、その他は一も得ること難しい。

古来立山には温泉湧出の場所少ないが、現に建物の設けあるは此処あるのみ、これを多枝原の湯という。湯元はかつて湯川の南岸客舎近くにありしも、今は北岸の岩隙より湧き出ている。無色透明にして清澄華氏134度(55度C)の熱を保つ泉源の深きこと知るべきなり。洞穴より筧(懸樋)にて之を浴室に引けり、浴室は湯川を隔てて南北二個あり、いずれも又浴槽を二個備え一つは熱く、一つは程よく温かい。中にも胃病、関節患、腺症、神経、梅毒、瘡毒などには効験著しと云う。

1902(明治35)年:『立山権現』より

※①『立山権現』が出版された当時の新聞には、立山登山の案内記としては初めての出版物であるが、実地の踏査と詮索によって書かれたものであるので、登山をする際に「中語」の講釈を聞くに及ばないと批評している。

②「立山温泉」は、明治以前は「多枝原温泉」あるいは「立山下温泉」と呼ばれていた。

③1907(明治40)年夏、劔岳山頂に三角点を埋設した測量官・柴崎芳太郎が立山温泉に宿泊した時に泊まったのは、長屋と呼ばれた一般湯治客用の行燈部屋であった。

④佐々成政が入湯したと云われる内蔵助湯が一段高い場所の岩穴に湧く湯であったが、1858(安政5)年の鳶崩れで壊滅したといわれている。

2. アーネスト・サトウが見た立山温泉

—イギリス人・駐日英国公使館書記官

—日英関係の進展に尽力

山小屋から一里十町ほど歩いたところが立山下温泉である。立山下すなわち「立山の下」である。温泉水には味がないが、摂氏五十度もあり冷泉水とともに飲料水として使われている。温泉は共同風呂なので外国人には不向きである。付近一帯の土壤は不毛で、食料などの生活必需品はすべて下流の原から運ばれている。

1878(明治11)年:『日本旅行日記1』より

※①サトウはイギリスの外交官で、幕末から明治にかけて活躍し、通算25年間の滞在期間中に日英関係の進展に尽力した。

②明治11年に、信州から針ノ木峠を越え立山温泉に立ち寄っている。

③サトウは、横浜で「ジャパントイムズ」に日本の将来について随想を書いた。「幕藩体制を精算し中央集権制度を採用しないと日本はダメになる」將軍は皇帝でなく、大名の大いなる者ということをサトウは見抜いていたのだ。…まさに、明治維新の原型になる論文であったので、司馬遼太郎はドナルド・キーンとの対談の中で、サトウは幕末の重要人物であったと述べている。

3. パーシヴァル・ローエルが見た立山温泉

—アメリカ人・天文学者

—火星に高等生物が存在するユニークな学説を発表

この高原は、純白無垢の雪で一面に被われ、中央部の風雪が特に激しいと見られる地点には、一固まりの山小屋が、いかにも哀れそうに立ち並んでいるのが目に入った。山小屋は立山下温泉の建物であり、夏には山頂を目指して登る人たちの、恰好の安息場所になっている。また、この小屋では、常時二人の見張人が雇われて住んでいると、富山を出発する時に聞かされた。1889（明治22）年：『NOTO—能登・人に知られぬ日本の

辺境』より

※①ローエルは、火星の研究や冥王星の存在を予言したことで知られる天文学者であるが、1883（明治16）年から1893（明治26）年の間、数度にわたって日本を訪れている。その著作は当時の西欧社会に大きな影響を与え、ラフディオ・ハーン（小泉八雲）の来日するキッカケの一つともなっていたと言われている。…ハーンの著書や蔵書を集めた「ヘルン文庫」は富山大学中央図書館にあります。

②明治22年、日本地図を見ていたローエルは、“ふと思いついて”日本の辺境・能登旅行を計画した。その帰り途、七尾から石動、富山へ向かう途中に「針ノ木峠」越えを思い立ち、立山温泉に立ち寄っています。能登旅行理由は、日本人が西欧文明の模倣に明け暮れる東京の風潮に愛想をつかし、純粋な日本の姿を辺境の地・能登に期待したのでなかろうかといわれている。

③「NOTO—人に知られぬ日本の辺境」は、当時の中部日本、とりわけ富山県の状況をいきいきと伝える貴重な資料となっている。

4. ウォルター・ウェストンが見た立山温泉

—イギリス人・キリスト教宣教師

—日本山岳会設立に寄与

そこには竜山下とか立山とも云う温泉、つまり立山の下の温泉として知られている小屋が奇妙に集まっていた。そのなかには、経営者の事務所と台所のような所と、比較的好いお客のための2、3の個室があった。これと直角に5、6列の小屋があって、もっと貧しいお客がはいっていた。その人たちは、寝室にも食堂にもなる2.5m四方くらいの小さな部屋へ食べ物を持ち込み、自炊するのである。居間は浴場にもなっているのである。どのお客も部屋代と風呂代に一日半ペニーを支払う。湯殿そのものは、構内の一番はしにあって、西側が一部分開いた大きな小屋でできている。

浴槽は四つに仕切られた木の非常に大きなタンクで、四方おおよそ3.5mくらいである。湯の温度はそれぞれ41度から49度くらいまでである。入浴者はおもに、常願寺川の上流近くの村々からくる百姓だった。男女混浴で時には一度に50人くらいも入るけれども、みんなの態度は非常に行儀がよい。

1896（明治29）年：『日本アルプス—登山と探検』より
※①ウェストンは、1888（明治21）年に来日し、日本各地で布教活動を行なう傍ら、日本に深い関心を抱き、日本研究に力を注いだ。3回の日本赴任中に富士山、槍ヶ岳、立山などの山々に登り、美しい文章で日本の山々を紹介しました。1905（明治38）年に「日本山岳会」設立に寄与し、「日本近代登山」の父と称される。…日本山岳会初代会長の小島烏水は飛騨山脈を「北アルプス」、木曾山脈を「中央アルプス」、赤石山脈を「南アルプス」と命名した。

②ウェストンは、ローエルの著書「NOTO・能登」を読み刺激されて、信州大町から針ノ木峠を越えて立山温泉に宿泊している。

③立山温泉様子を詳しく説明しているのので、当時の様子が手に取るようになります。また、風呂に入る礼儀正しい日本人の姿に驚いている様子が分かります。

あとがき

立山温泉は、名湯として江戸時代から賑わい、明治期になると湯治客だけでなく立山登山の基地として、立山砂防工事の基地として活躍し黄金時代を築きました。しかし、戦争が始まると砂防工事が中止となって温泉が寂れ、戦後になって復活したが昔日の繁栄とならず次第に衰退し1973（昭和48）年に閉鎖となりました。秘境としての立山温泉が復活して欲しいと願う次第であります。

（公財）立山カルデラ砂防博物館
アドバイザー 今井清隆



立山温泉跡地



立山温泉 ヨハネス・デ・レイケ
(1949年：明治24年)



江戸時代の立山温泉絵図

祝・北陸新幹線開業 特別展

「北極と立山のひみつ」

－3月7日(土)～6月28日(日)

日本ではじめて富山で開催された北極科学サミット週間(4月23～30日)に合わせて北極と立山の氷河や生き物、気候、地形についてパネルや映像を中心に紹介しました。また、探検家の植村直己がグリーンランドで採取した雪のレプリカやホッキョクグマとツキノワグマの頭骨標本、スバルバルライチョウの羽や卵などの現物展示も行いました。

4月26日には、北極科学サミット週間の室堂巡検に参加した外国人40名も来館し、熱心に展示を観覧していきました。来館した外国人からは「ポーランドにも、立山の氷河と同じような小氷河が一つだけ残っている」とか「もっと立山の氷河の情報を充実させて欲しい」とのご意見を頂きました。(学芸課 福井幸太郎)



公募写真展

「レンズが見た立山・立山カルデラ —大地と人の記憶—」

－3月14日(土)～4月12日(日)

昨年7月から10月に開催された「立山カルデラ砂防体験学習会」に参加された方々や立山カルデラ解説員のみなさん、博物館職員などから常願寺川や立山にちなんだ作品を公募し、51点の作品が集まりました。

今年は立山カルデラ内外のさまざまな自然の表情や災害を防ぐ目的のために作られている砂防施設、立山を代表する橋渡りの儀式「布橋灌頂会」などを撮った数々の作品がありました。

なお、館内展示終了後、富山駅前cicビル1階エレベーターホールにおいて巡回展を行いました。

期間中、744人の方にご来館いただきました。

(学芸課 是松慧美)



館内での展示



富山駅前cicビル1階エレベーターホールにて

立山カルデラの両生類

アズマヒキガエルの産卵

アズマヒキガエルは立山周辺を散策する際、目にすることの多い両生類です。富山県内では山地を中心に広く分布し、立山カルデラにも数多く生息しています。

春は彼等にとって繁殖期です。5月末から6月初旬にかけ、カルデラ周辺の池や水たまりなど、いたるところで産卵が見られます。普段は周囲の林内に散り散りになって生活しているカエルたちが、この時ばかりは産卵場へと集まってくるのです。この地域では繁殖期に体の色がオスは黄褐色、メスは赤褐色になる傾向が強いようで、立山カルデラ内の多枝原平の池では色鮮やかなカエルたちの繁殖行動が見られました(写真1)。

水中の落ち葉などを食べて育った幼生は、7月に入る頃に変態し、いっせいに上陸します。変態直後の幼



写真1 産卵中のアズマヒキガエル

体は数こそ多いものの、一匹一匹は体長1cmにも満たない小さなカエルです(写真2)。それだけに、弱く、野山は天敵ばかりです。

私たちの前に現れる、大きく立派なアズマヒキガエルの成体たち。彼ら一匹一匹の「ふてぶてしさ」は過酷な試練を乗り越え、生き延びてきた証なのでしょう。

(学芸課 澤田研太)



写真2 上陸直後の幼体



孵化が始まった水たまり



手足が出てきた幼生たち

巡回展

「立山を愛した画家 大島秀信展 —富山県立近代美術館所蔵作品による—」

—4月18日(土)～5月17日(日)

富山県立近代美術館のご協力を得て、今年も巡回展を開催しました。

今年は富山県を代表する日本画家 大島秀信氏の作品5点を展示しました。大島氏は東山魁夷から自然への深い想い、そして明快な造形思考を受け継ぎ日展には立山連峰などを画題とした作品を出品し続けました。来館者の方からは、「これは称名滝かしら?」「とても素敵な作品が見られて良かったです。」などといった感想が聞かれ、自然と深く対話した力作をお楽しみい



ただけたのではないのでしょうか。

期間中3,892人の方々にご来館いただきました。

(学芸課 是松慧美)

フィールドウォッチング

「春の立山 雪の大谷」

—5月10日(日)

立山黒部アルペンルートの人気スポット「雪の大谷」で、「雪の壁」の観察会を行いました。

まず、立山自然保護センター脇の「雪の回廊」で、今冬の積雪について解説を行いました。雪の壁にはたくさんの層があり、それが冬の気象条件を物語っていることや、黄砂などの大陸から飛来した物質が取り込まれていることなどの話を聞きました。

その後「雪の大谷 雪の壁」へ移動し19mの高さの雪壁の迫力を体感しました。高さは異なっても層の構造



は「雪の回廊」と同じで、いつ頃の雪がどのような条件で降り積もったのか実感することができ、「雪の壁」の秘密にせまりました。

午後はミクリガ池を一周し、ライチョウにも出会うことができました。天候にも恵まれ、参加者の皆さんも満足されたのではないのでしょうか。

(学芸課 是松慧美)

立山夏山開き共催フィールドウォッチング

「材木坂と美女平」

—6月28日(日)

朝まで大雨警報の出される悪天でしたが、心配していたキャンセルも想定内の数名で、元気に出発しました。ただ雨が強く、最後まで雨具姿の観察となりました。同じ降水でもブナの林の中では雨は弱くなり、ブナ林のもう一つの素晴らしさを十分体験できたと喜ばれました。急坂で、しかも雨で滑りやすい岩の道、不安に感じた参加者もいらしたようですが、スギやブナの巨木にふれ、小降りの時にはツツドリの特有の声も聞こえ、熱心に解説を聞きながら美女平には正午過ぎに到着しました。昼食は美女平駅の2階を借りてとらせ



ていただきました。感謝。

午後は雨が一段と強くなり、事故の心配もあり、残念でしたが美女平の自然観察は次回の楽しみにして解散、立山ケーブルで下山しました。参加者は28名、2班に分け行動しました。(学芸課 菊川 茂)



にぎわいを見せた立山温泉

当館立山カルデラ展示室に立山温泉の様子を模型で再現した展示コーナーがあるのをご存じでしょうか。

立山温泉は立山カルデラの中央に位置する胃腸病等に良く効く温泉として賑わってきました。1858年(安政5)年の鳶崩れによって温泉小屋は土砂の下に埋もれましたが、再興され、明治時代には湯治場としてだけでなく、立山登山の基地として賑わいました。

1906(明治39)年に県が、1926(大正15)年に国が砂防工事事務所を温泉敷地内に設置すると工事作業員も加わり一段と賑やかになります。

しかし昭和40年代になり立山黒部アルペンルートが開通すると、温泉に立ち寄る登山客は減少し、さらに1969(昭和44)年の水害で登山道が不通となったために

温泉は閉鎖となりました。

展示では聞き取り調査をもとに、賑わいをみせていた昭和初期の立山温泉の様子を再現しています。立山登山を終えて温泉に到着した登山客や、砂防工事を終え飯場へ戻ってきた工事作業員、夕飯の準備をする従業員などの様子を模型と音声で紹介しています。

さて、作業員や登山客の会話に耳を傾けると、富山弁だけでなく様々な地方の言葉が聞こえてきます。立山温泉には富山県内のみならず、各地から湯治客や作業員が訪れていたのです。

博物館へお越しの際は、模型のみならず、方言の飛び交う会話にも耳を傾けてみてください。

(学芸課 是松慧美)



昭和初期の立山温泉の様子



飯場へ帰る工事作業員



立山登山を終えて温泉に到着した家族

● 資料収集についてのおねがい

立山カルデラの鳶崩れが原因となった安政の大災害に関連した資料を収集しています。写真、文書、絵図等過去の様子わかる資料をお持ちの方、資料の所在にお心当たりの方は、下記までご連絡いただければ幸いです。

連絡先 立山カルデラ砂防博物館学芸課

TEL.076-481-1363 FAX.076-482-9101

1980年西大森の大転石



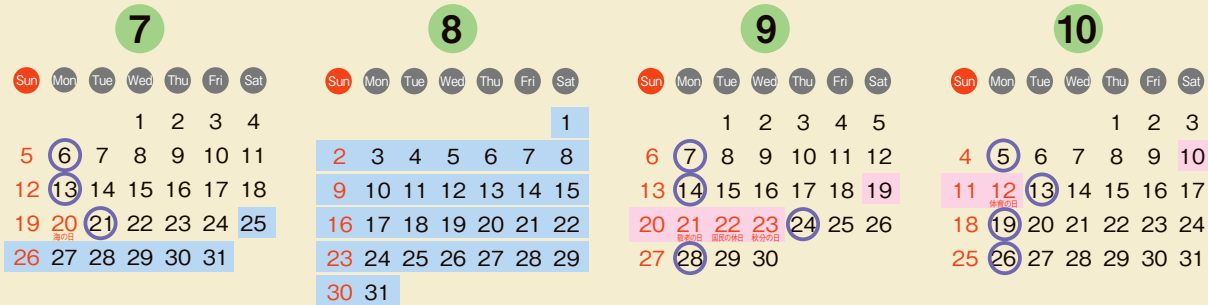
イベント案内 (2015年7月～10月)

開催日	内容	会場(入場料など)
7月18日(土)～ 9月27日(日)	●北陸新幹線開業記念 企画展「立山、大地の公園を歩こう！」 美しい眺望、珍しい景観、厳しい環境を当たり前のように受け入れて生きる動植物。立山の様々な表情や環境は、大地の営みによってもたらされています。ひっそりと、実はかなり大胆にたたずむ大地の秘密は、少し視点を変えると見えてきます。立山のルーツを探る、大地の公園の歩き方を紹介します。	当館：企画展示室、エントランスホール (無料)
9月5日(土)	●フィールドウォッチング「立山の氷河眺望」 雄山への登山道を辿りながら、氷河遺跡をめぐり日本で唯一の氷河を眺望します。	要申し込み (先着順) 定員20名 参加費：5,000円 (小学生2,500円)
9月6日(日)	●フィールドウォッチング「室堂山・浄土山とカルデラ展望」 浄土山への登山道をたどりながら、立山の生い立ちや大地の変遷について紹介します。	要申し込み (先着順) 定員30名 参加費：4,000円 (小学生2,000円)
10月3日(土)～ 12月26日(日)	●特別展「新湯-立山カルデラの神秘的池-」 天然のオパール「玉滴石」がつくり出されたり、忽然と干上がったりする立山カルデラのお湯の池「新湯」の秘密について紹介します。	当館：企画展示室 (無料)
10月3日(土)	●フィールドウォッチング「秋の弥陀ヶ原とカルデラ展望」 弥陀ヶ原を散策しながら、地質地形や動植物、立山カルデラについて観察します。	要申し込み (先着順) 定員40名 参加費：3,000円 (小学生1,500円)
10月18日(日)	●フィールドウォッチング「秋の有峰と常願寺川砂防治水探訪」 常願寺川をたどりながら、断層や動植物、大転石、砂防治水施設当を見学します。	要申し込み (先着順) 定員20名 参加費：1,000円 (小学生500円)

Calendar 7月から10月の休館日

※小・中・高校生の観覧は無料です。

○：休館日 赤：日曜・祝日・祭日



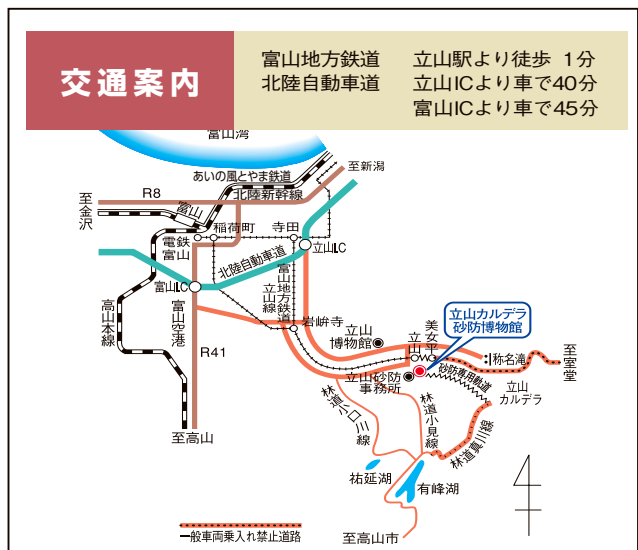
【博物館 開館時間】 通常開館 9:30～17:00 8:30～17:00 9:00～17:00(入館は 16:30まで)

〈編集後記〉

さて、2014 (平成26)年に立山黒部が日本ジオパークに認定され、はや一年。ジオパークとは「大地の公園」を意味し、「立山黒部」エリアは海拔3,000mの立山連峰から水深1,000mの富山湾までの「高低差4,000m」の広大な範囲に、特色ある地形・地質等が分布しています。

2015 (平成27)年夏季企画展では、立山周辺のジオスポットに焦点をあてて、立山山麓、弥陀ヶ原、室堂平等の大地の成り立ちや動植物の見どころを紹介します！

夏山シーズン到来！
ぜひ、立山へお越しください！



編集・発行 公益財団法人立山カルデラ砂防博物館

〒930-1405 富山県中新川郡立山町芦崎寺字ブナ坂68
TEL (076) 481-1160 FAX (076) 482-9100
ホームページ <http://www.tatecal.or.jp>

「博物館だより」は環境に配慮し、古紙パルプ配合率80%の紙と植物油インキを使用しています。